

語彙を広げるための描写指導法

——『樺』の描写調査を通して——

本山 育人

1 樺の描写による語句調査の概要

文章表現に関して、今まで私自身の作文指導の過程を振り返ってみると、想起力・想像力・思考力などいわゆる「思い」を大切にできて、もう一方の作文の要素でもある「見る」（題材発見能力）ことについての指導はあまり取り組めていなかったのではないかと反省している。作文技術の発達過程では、「見る」と「思う」の両要素が相伴って高まっていくものと考ええる。

そこで、あえて生活の一場面を切り取って考えたり、学習者が同一の対象を見つめて記述（描写）し、互いの見方や書き方の違いについて話し合う中で、表現の多様性を知りより適切な記述の仕方に気付いていくのではないかと考えた。

描写の流れとしては、「静物のスケッチ」→「動く物のスケッチ」→「その背景のスケッチ」→「思ったこと・感じたこと」というステップを考えた。また、豊かな表現というものは、単に見えている物の詳しい描写に留まらず、見えない物に対する描写や心情的表現が出てくるようになることよりよい表現と考えた。そこで、静物の

スケッチの一題材として樺を取り挙げた。

私が昨年度勤務していた柳町中学校（長野市）の校庭の回りには六本の樺の木が立っている。そのうちの一本はプールの隣にあり、根が半分失われ枯れかかっているが、時には木陰の提供者となり、時には自然を感じさせる対象となり、時には落葉などの清掃の対象ともなり、生徒たちにとってもなじみの深い木である。

その、同じ対象物である樺の木を描写する際に、事前指導として、描写する観点を与えたり実際に樺を直接観察させたうえで書いた場合（A学級）と、そのような指導はいつさい行わないで文章を書いた場合（B学級）とではどのような語句の差異が生じるのかを目的として、次のような概要で語句調査を行った。

① 調査対象 長野市立柳町中学校二学年

A学級（事前指導あり） 三四名

B学級（事前指導なし） 三一名

② 調査年月 平成四年七月初旬

③ 調査内容

A記述条件

柳町中学校の樺の木が読む人の脳裏に思い描けるように、二百字以内で書く。

イ語句の分類

ウ樺の各部分文を形容する語彙の比較

2 樺の語句分類の結果

(1) 観点別語句分類の対比

描写の語句分類の基準については、次のような順序で行った。まず、樺を修飾したり述語的に述べていることを一事例とし、

① 単語段階で一つの意味を示している

② 文節・連文節段階単位で一つの意味を示している

③ 一文で一つの意味を示している
という段階に抽出した。

この際に、文末が敬体になっている場合は、可能な限り常体に置き換えた。また、活用する単語については、終止形に置き換えた。次に、描写の観点別に分けた。細別できる観点についてはさらに下位項目を設けた。以上のような手順で行った「樺の描写語句一覧表」(紙面の都合で割愛)をまず作成し、これをもとにし項目別に事例数と使用頻度(学級提出者数を母数とした)をまとめたのが、A表―I Vである。この際、B学級の一人は、「樺」と「柳」を勘違いして記述してあったので、母数から除外した。まず、描写の観点を十三類別に分けたが、その観点別の使用割合を対比してみると、事前指導した

A学級が上回った観点は、「全体像」「幹」「葉」「枝」「根」「木漏れ日」「木の下」「場所」「数」「感想・感覚」であった。逆に、事前指導をしないB学級が上回ったのは、「歴史」「体験」「印象」となった。実際に樺の木を目で見たり、手で触れたりしてメモを採らせて書いたA学級では、樺の各部分に対する描写が当然多く現れた。一方、樺の木は知っていても、教室でいきなり課題を与えて書いたB学級では、記憶にたよっているため、具体的な部分についての描写は少な目であり、回想するような観点が多目となった。特にその差異が大きくなるような観点は、「幹」「木漏れ日」「数」がA学級に多くなった。これは、明らかに観察したことが基礎にあるから、記述されることも多くなるのである。逆に、B学級では、「体験」と「印象」が大きく上回り、特に「体験」の観点はA学級には現れなかった。また、印象についても、自分の体験に基づいた記述が多く見られた。全体の描写項目の使用割合を見ると、A学級は一人当りの平均が七・二六となり、B学級での一人当りの平均は四五五となつて、事前指導を加えた方が記述内容も豊富になつた。

事前指導を加えた方が、書く内容が多くなり詳しくなるだろうという予想は調査以前につくことであった。しかし、今回描写された観点別に比較して見ると、実際に書いて書いた文章の方が読み手に対しては具体的に思い浮

<表-1> 標の描写項目別事例数および使用割合

学級 観点	A学級（事前指導あり）			B学級（事前指導なし）		
	全事例数	語句数	割合	全事例数	語句数	割合
全体像	73	34	2.15	28	14	0.93
幹	66	42	1.94	18	16	0.60
葉	28	24	0.82	9	9	0.30
枝	8	8	0.24	2	2	0.07
根	13	12	0.38	8	8	0.27
木漏れ日	14	14	0.41	2	2	0.07
木の下	20	19	0.59	13	12	0.43
場所	14	11	0.41	10	8	0.33
数	3	3	0.09	-	-	-
歴史	7	7	0.21	8	8	0.27
感想・感覚	17	16	0.50	13	12	0.43
体験	-	-	-	12	12	0.40
印象	21	21	0.62	38	37	1.27
合計	247	211	7.26	164	140	5.45

かべ易いものになり、記憶にたよる場合には、作者の主観が多く入り込み、課題である「読む人の脳裏に思い描けるように」という条件を満たすような具体的な対象物は伝わりにくいものとなった。

(2) 観点別語彙の比較

この項では、描写の対象となった標の各部位で用いられた語彙についての比較を試みたい。なお、ここで扱う語彙の基準としては、それぞれの観点を形容している単語とした。その際、例えば「大きい」「大きな」というように形容詞と連体詞にまたがる場合は、形容詞と意味的に同じ働きをすると解釈し形容詞に含めた。さらに、活用のあるものは終止形に改めた。また、A・B学級共通している単語を先に扱い、次には各学級独自の単語を扱った。

最初に「全体像」に関して分類・比較してみると次のようになった。

「大きい」に関係した語句数は三〇対二一（A学級対B学級 以下の比較はこの順番で行う）で、A学級を一人とした比率でみると、一：〇・八で大体同じである。それに比べ、視覚からくる語彙としての「どっしり・がっしり」は九対一（一：〇・一二）と大きな差異が生じた。その他の表現として、A学級では、色彩的な語句や目で見た感じからくる語句の使われ方が結構多いのに比

較して、B学級ではほとんど使われていない。その他のA・B学級共通の単語としては、「倒れない」が挙げられる。A学級独自の単語としては、「のっぽ」「太い」「たくましい」「芽ぶく」「おおらか」「色づく」「枯れゆく」「アビールする」「ふっくら」「丸み」「キラリキラリ」「緑色っぽい」「枯れそうだ」「ガッチリする」「やすらか」「どしんど」などが挙げられる。また、B学級独自の単語としては、「目立つ」「針葉樹」「広葉樹」「ゆれる」などが挙げられる。

以下、同じ様な方法でまとめたのが、A表12Vである。

幹の色彩に関する語彙を比較すると、A学級では「灰色」「緑色っぽい」に対して、B学級では「こげ茶色」「こげ茶色っぽい」という語彙であった。これは、絵画指導においてもよく見られる現象だが、木の幹は「こげ茶色」という概念が小さい時からできあがっており、彩色する時にこげ茶色で表すことがある。しかし、実際によく見て描くように指導すると、単にこげ茶色ではなく、部分によっては灰色に見えたり緑色っぽく目に映る場合があるのである。この色彩的な語彙は、葉に関しても同様であり、A学級の方が語彙数が豊かであり、なおかつ「落ち着いた」色であるという、単に視覚からくる感覚だけでなく全身的な感覚からくる語彙も見られた。

このように語句や語彙の比較をしてみると、実際に対

<表-2> 樺の各部位の形容語彙の比較 (アンダーラインは共通の語彙)

描写の観点		A学級 (事前指導あり)	B学級 (事前指導なし)
全体像	高さ 大きさ	高い(4), のっぽ 大きい(30), 長い(2), 太い(9), ふ っくら, 丸み, 緑色っぽい,	高い(2), 大きい(21),
	色彩 印象	どっしり(7), どしんと, がっしり(2) ガッチリ, がっちりする, 力強い, た くましい, おおらか, やすらか,	がっしり,
	作用	芽ぶく, 色づく, 枯れゆく, 枯れそう だ, アピールする, 倒れ(ない), 座 る, 一生懸命生きる,	ゆれる, 目立つ, 倒れ(ない),
	状態 形態	キラリキラリ, 樹齡, お父さん (のよう)	針葉樹, 広葉樹,
	幹	表面の状態	ゴツゴツ(11), ぼこぼこ(2), ざらざ ら(4), ポロポロ(3), 固い(4), ひび (が入る), きれいだ, とれる(2), はがれる(6), はげる(3) むける, くずれる, (顔を)出す, 皮(6), 樹皮, こげ(15), 虫たち, ア リたち, ゴキブリ, 巣, 枝(2), 葉(2) 年輪,
	表面の作用	太い(9), ニメートル位, 大きい, 長い, 灰色, 緑色っぽい, がっしり(2), どっしり, たくましい 力強い, 強い, かまえる, 支える(3), 倒れ(ない), そなえる,	むける, とれる,
	表面の形態	太い(3), 直径一メートル位, こげ茶色, こげ茶色っぽい, がっちり, 自然,	皮(2), 樹皮, コケ, 幹(2), 枝, 葉, 穴, セミ(2),
	太さ 大きさ	支える,	
	色彩 印象		
	作用		
葉	形態 数量	小さな(4), 広く, 長い, 丸い, 沢山(7), (数が)多い, 何枚も, う じゃうじゃ, いくつも,	沢山, 緑, 緑色(3), 黄色, 茶色
	色彩	緑, 緑色, うす緑, 黄緑色, 黄色い, 青々と, 青々しい, 青菜, (色は)落 ち着いて, あざやかだ, きれいだ(2), 楽しそう, 新しい(芽), 重なり合う, つい(ている)(2), 繁 る(2), (目に)しみる, 見える, 輝 く(2), 光っ(ている)(2), すきとお っ(ている), (満開に)する, ゆす られる, ゆられる, 流れる, 涼しめる	
	状態		
	作用		重なり合う, わきあがる(ように), 見おろし(ている), 繁らす, 作っ (てくれる), つけ(ている), 降る, 落とす, つい(ている),
枝	形態 数量	太い(2), 長い, 多い, 何本も, 沢山, いっぱい, いく つにも, りっぱだ, 出(ている), ある, かかえる, 分か れ(ている), 伸び(ている), 丸出 し(にする),	沢山(3),
	状態 作用		出る, つい(ている),
根	形態	太い(3), 大きい,	太い,

象物を見た方が使用語の種類が豊富であることが明らかになった。しかし、文章の豊かさとは単に語彙の量的差から生じるのかは疑問である。実際にどの様な語彙がどの様に組み合わせられ使用されているのかとか、どんな目的の文を書くのかによって決ってくるのであろう。次項で実際に書かれた文章での比較を試みていきたい。

3 樺が思い描ける文章とは

前項では、樺を形容する語彙を中心に考察してきたが、今度は、読み手の側としてどのような文章が的確な文章であるのか考えてみたい。まず、比較の例として(1)項目網羅型 (2)項目少数型 (3)印象中心型の三タイプを挙げてみた。

(1) 項目網羅型 〔例文1〕

おおきななつばの樺の木

A組H男

柳町中学校には、多くの樺の木があります。それらは、大きくどっしりと立っています。それ立派な枝がいっぱいあり緑の茂った葉などがあります。木は、とても太くゴツゴツしています。こけ

がたくさんついでおり根はとても大きく立派です。木影はとても涼しくそこから見る太陽の木漏れ日は美しく最高です。木影にいと気持ちがよくて眠くなってしまいます。このように柳中の樺の木はとても大きくのつばで立派な木です。

描写の観点としては、前項で分類を試みた十二項目の内、「全体像」「幹」「葉」「枝」「根」「木漏れ日」

「木の下」「数」「感想」「印象」と十項目もの記述がなされている。総合的な観察に基づいた文章であるといえる。総合的な意味での樺が描かれているといえる。このようなタイプ(六項目以上の観点で描かれている)で文章化した生徒は、A学級では一六人(四七%)でありB学級では二人(七%)であった。

しかし、項目網羅型といっても、A学級とB学級とは明らかに表現上での差異がみられた。B学級の文例を紹介してみよう。

〔例文2〕

B組R男

柳中の校庭の樺の木の所にはあまり行ったことはないけれど、体育で校庭に出る時は、樺の大きなかげによく休んだりしています。樺の木は、丈夫でたくましく、雨や風もなんのそ

のとう感じて、あのごつごつした幹や、そこにあら大きな穴とか、結構年寄りだなと思わせる所もあるけど、あの雄々しい姿からできる大きな影、時々行くときが和やかにまれるそんな気がする木です。ぜひ、樺の木に会ってみて下さい。

樺の各部にわたる描写ではなく、視覚的なとらえより自分の体験に基づいたことから、心象的なとらえになっている。この文章から、柳中の樺という個体ではなく、一般的な大きな木の下でうける感覚が描かれているといえよう。文章自体は味わいのあるものとなっているが、記述の条件「柳町中学校の樺の木が読む人の脳裏に思い描けるように、二百字以内で書こう。」というものは離れているといえよう。

(2) 項目少数型

このタイプの文章は、描写の観点が五項目以下のもを対象とした。

〔文例3〕

樺の力強さ

A組K子

柳町中学校にある樺の木は、とっても大きな木です。その木の中でいちばん最初に目についたのは幹

でした。あの幹は、他の木とは少しちがった感じがうけました。

ごつごつした感じ、かたさ、色などを見てがっしりとした木の力強さを感じました。その木の間に光が入り、葉が輝いていました。

項目網羅型に比べ、幹を中心に記述してある。自分の見たままを述べているが、その焦点は題名でもある「樺の力強さ」に結び付いている。全体像は描かれていないが、限られた字数内ではまとまりのある文章となった。その他の文章の特徴を総括すると、項目網羅型は視点があちこちと移動するのに対して、項目焦点型は述べられている観点が少ないため、視点の範囲がせばまっているが多い。

では、項目焦点型でもB学級の特徴はどうであろうか。

〔文例4〕

樺の木

B組Y子

とても大きな木で、針葉樹ではなく広葉樹です。葉の色は、ふつうと同じ緑色です。幹や枝は、少し濃い目のこげ茶色ようです。

全体的に見て、もう少しうすい色だったら、きれいな木になると思います。強い風が吹いても、絶対

に倒れないようです。

木の幹は、とてもザラザラしていて樹皮がむけそ
うです。

この文章の特徴は、まず文末が「ようです」という伝
聞推定の助動詞が用いられていることである。この文末
表現は、A学級には見られないものであった。また、

「針葉樹・広葉樹」という見たままの言葉というより、
むしろ説明的な言葉を使ったり、幹や枝の色についても
「こげ茶色」というように、遠くからシルエットのな感
覚でとらえた表現となっている。描写の観点としては、

「全体像」「幹」「葉」「枝」などに及んでいるが、
「全体的に見て、もう少しうすい色だったら、きれいな
木になると思います。」という一文は何の色について述
べているのか分らず述べている焦点がぼやけてしまっ
ている。その他にB学級独特の傾向としては、「日立の
CMの木にしています……この木何の木気になる木……
のCMの……。」という説明タイプや、「部活の時よく
見る樺の木。」という体験タイプ、「遠くからしか見て
いないので、分からないけど、……」という傍観タイプ
などが挙げられる。

この項目少数型の割合は、A学級一六人（四七％）、
B学級二〇人（六七％）であった。

（3）印象中心型

これまでの分類は、描写の観点が「見たまま」中心で
あったが、今度は「感じたまま」が中心となった文例に
ついて考察してみたい。対象物をまず見て、そこから受
ける印象をどう表現しているかということである。

〔文例5〕

偉大なる樺

A組Y子

校庭をぐるりと包みこむ、偉大なる樺。

夏には青葉を満開にし、冬には私の腕よりも太い
枝をまる出しにする大胆な樺。そんな樺を私は、幻
想的でお気に入りの一つとしている。なぜなら、あ
の偉大なる樺は、私を包み、別世界へと心を運んで
くれるからだ。そして気付いた時には、自分という
者の小ささを実感させてくれ、新たな心を開く
……。偉大なる樺。これは、自然界の母のだろ
うか。

自然界の樺を自分と対峙させ、「偉大なる」「幻想的」
「お気に入り」等の精神的役割をもたらず言葉を用いる
ことによって、描写の対象としての樺ではなく、樺その
ものからくる印象を描いているといえよう。この種の文
章は樺そのものを具体的に描いてはいない点では、作文

の課題条件を満たしているとはいえないが、味わいのある文章とか、豊かな表現という面では読み手に訴える要素の多い文章であるといえる。

この型の文章はA学級でもう一人いたので、その文章を見てみたい。

〔文例6〕

樺の四季

A組D男

「樺」 春芽ぶき、夏おおらかに、秋色ぶき、冬散ゆく。太く、大きく、高く、そこには自分をアピールするものが感じられる。日あたりは昏く涼しめる広く長いくつもの葉、秋は人の心を動かす様な色ぶき。その色は落ち着いていてまたなんとも言えない様のない色。冬はどっしりとかまえた太い幹で習に備え、春また新しい芽を出す。この街中で樺の回りだけが落ち着きはらっている、柳中の樺。

一年をとおしての、樺の姿や印象を綴ることによって全体像を描き出そうとした文章といえる。細かい描写というより、移り変わるアウトラインを描くことによって、樺のもつ「落ち着き」を描き出している。

文例5及び6のタイプは、いわゆる写真の解説文として使用すれば、読み手には大きな効果をもたらすものと

思われる。

では、同じ印象中心型として分類したB学級での文章はどうであろうか。

〔文例7〕

樺の木

B組K男

体育の授業で校庭を走っていると、何かにつまづいた。それは大きな樺の木だった。いかにも自分の走り方を見なおせようとしているようだった。樺の木は、自分にとってとても印象深いものだった。小さいころから樺の木に乗って遊んでいた。樺の木にさわるとそのころのことが思い出され、とてもリラックスしてくる。悩んでいたことも、解決しそうな気分になってくる。

自分の現在や過去の体験に基づいて、樺に対して自分の感じた印象を中心に述べている。しかし、この文章には樺の木そのものに対する描写がないため、読み手としては、対象物である樺の木を思い描くことは困難である。このようなタイプの文章は、B学級では八人中五人までがそうであった。残りの三人は、さらに文数が少なく、印象を述べているのだが訴えるものが単純になってしまっていた。

ちなみに、印象中心型はA学級では二人（六％）、B学級では八人（二七％）であった。

（4）「豊かさ」「適切さ」を求める作文指導の指針

以上、実際に対象物を観察させた上で記述させた文章と、観察なしで記述させた文章との比較から、概括すると次のことがいえる。

- 一・実際に観察して記述した場合には、使用語彙数が増える。特に視覚からくる形容語が多い。
- 二・観察を行わない場合の記述は、自分の過去の体験や経験に基づく表現が多くなりがちである。また、事実を述べることもよりも印象的な表現が多い。
- 三・使用語彙数が多いと、多面的な視点から対象を描くことが可能である。しかし、使用語彙数が多いことと文章の豊かさとは一概に関連するとはいえない。
- 四・文章を書く目的・字数・読み手意識等によって、基準は変わってくるが、描写の記述を交えた方がより豊かさや適切さが増す。

これらの観点をふまえた作文指導を仕組めば、語彙が増し、適切な文章表現ができるのではないかと考える。そのためには、題材によっては、実際に現物を様々な角度からとらえてみたり、現物での観察が無理の場合には、写真やビデオなどの映像で見させることが、描写表現力の向上へと結びつくものと思われる。

以上述べてきたのは、直接的な描写表現についてであるが、さらにレトリックを生かした文学作品を鑑賞させることよって、心象的な描写（私は、「精神的描写」と「象徴的描写」の過程に分類した）の仕方を学ばせることも可能である。「櫻」を対象物とするようなときは、長田弘氏の「おおきな木」という散文詩が効果的であると思われる。以下作品を紹介し、拙筆としたい。

おおきな木をみると、立ちどまりたくなる。芽ぶきのころのおおきな木の下が、きみは好きだ。目をあげると、日の光が淡い葉の一枚一枚にとびちってひろがって、やがて雫のようにしたたつてくるようにおもえる。夏には、おおきな木はおおきな影をつくる。影のなかにはいつてみあげると、周囲がふいに、カーンと静まりかえるような気配にとらえられる。

おおきな木の冬もいい。頬は冷たいが、空気は澄んでいる。黙って、みあげる。黒く細い枝々が、懸命になつて、空を掴もうとしている。けれども、灰色の空は、ゆっくりと旋るよううごいている。冷たい風がくるくると、こころのへりをまわって、駆けだしてゆく。おおきな木の下に、何があるだろう。何も無いのだ。何も無いけれど、木のおおきさとおなじだけの沈黙がある。

（もとやま　いくと　中野市立中野平中学校教諭）